

中村欣一郎市長の

山椒は小粒でも…

Vol.42

三重大大学がやってきた



小浜町にある鳥羽市水産研究所(略して水研)の隣に、三重大学生物資源学部の水産実験所が姿を現しました。思っていたより大きい。ウチの水研よりデカイ:

水研は従来のワカメやクロノリの種苗生産に加え、海の環境や海洋教育のフィールドとしても活用していく予定です。三重大大学の実験所はイセエビやアワビ類などをはじめとした、さまざまな水産生物に関する実習や実験などを行う施設です。この同じ海域で研究する2つの施設が、隣りあって立地するということはすごい相乗効果が期待できます。しかも、巻頭の対談でも紹介しているように、志摩市に県の水産研究所、南伊勢町に国の増養殖研究所、鳥羽には海の博物館、鳥羽水族館、ミキモト真珠島の真珠博物館、鳥羽商船高等専門学校、菅島には名古屋大学の臨海実験所と、これだけの海に関する研究施設

設が一か所に集まっているのは、国内はおろか世界でもまれな地域だと思えます。

その中でも鳥羽にある施設はもつとも都市部に近く便利で、学生や研究者、見学者を受け入れるのに十分な宿泊施設もあります。地域全体で「海」をキーワードにまちづくりをしていく夢がふくらみます。アメリカのカリフォルニア州には半導体メーカーが集まってIT企業の一大拠点となっているところが



三重大学水産実験所

鳥羽市水産研究所



あり、シリコン(半導体の原料)バレー(深谷)と呼ばれていますが、さながら、伊勢志摩は海のシリコンバレーのようだと私は称しています。

ちなみに、旧小浜小学校は三重大学の学生さんたちが研究や実習をするための実習場所として利用されます。鳥羽の子どもたちと交流する機会などもつくれるのではないかと期待しています。アメリカの老家シリコンバレーも、初期のころ、周囲の大学との連携が地域の発展に大きな役割を果たしたといわれています。ぜひ、世界の先進事例に倣いた



Vol.202

教育委員会生涯学習課

☎ 1268

3・11から学ぶ 東日本大震災から10年

2011年3月11日午後2時46分、日本列島は激しい揺れに襲われました。「東北地方太平洋沖地震」と名付けられたこの地震の規模はマグニチュード9.0、最大震度7でした。

その強い地震とともに太平洋沿岸を襲ったのが、最大21メートル、遡上高が40メートルを超えた地域もあるという大きな津波でした。それは未曾有の大災害をもたらし、多くの生命が奪われ、生活を破壊され、住み慣れた居住地からの避難を余儀なくされました。

阪神・淡路大震災や熊本地震も含め、これらの災害は甚大な被害をもたらしました。そして、その災害の現実から私たちは社会的に弱い立場になりやすい女性や子ども、障がいがあ

る人、性的マイノリティ、在住外国人を始め、すべての人の人権を守るこの大切さを学びました。

3・11以降、防災や減災に関する取り組みや施設整備などが、それまで以上に行われており、防災訓練や防災教育でも人権を守るという視点での取り組みが行われています。

2015年9月には、国際連合で「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択されました。前文には「だれ一人取り残さないことを誓う」すべての人々の人権を実現する」と明記され、人権尊重の理念が基礎にあることを示しています。その11番目の目標には、「住み続けられる街づくり」を掲げ、具体的な取り組みとして災害に対する強靭さ(壊れない強さ)ではなく、壊れてしまってもすぐに回復する強さ(強さ)を目指すことが書かれています。

東日本大震災から学んだことを基に「だれ一人取り残さず、全ての人の人権を実現し、住み続けられる街づくり」を進めるために、私たち一人一人ができること、やるべきことをもう一度確認する必要があるのではないのでしょうか。